

ふるさと交友録

～伊藤 公平～ 6

「ふるさと」には、いろいろなひとがいる。この「交友録」では、月1回のペースで公平さんの“大切なひとびと”を紹介していただきます。



置き薬の箱と薬(旭川北鎮記念館)

伊藤公平(いとうこうへい)北見市在住、郷土史研究者。私設図書館「麦の風文庫」と「野草苑があでんきたみ」主宰。平成13年～20年、みんとに「ふるさと四方山話」「ふるさと・そぞろ歩く記」を連載。

富山といえば「越中富山の薬屋さん、

鼻くそ丸めて萬金丹…」と囃された、掛売り行商薬屋さんの故郷である。緑ヶ丘辺りが北見市高台番外地(本当はちゃんと地番があった)といわれた頃、六十年程も前、この薬屋さんがわが家にも来ていた。大きな柳行李を二反風呂敷に包んで背負って来た。秋、農家の農作業が終わって現金収入を手にした頃である。

薬屋さんは昨年色々…と久闊を詫び、こちらも、いやいやこちらこそ…とお互いの無事を喜び合ったら、さて、商売である。薬屋さんはやおら大きな風呂敷包みを引き寄せると結びをほどき、柳行李のフタに手をかける。

富山の薬屋さんの商法を「先用後利」という。風邪薬だの、頓服だの、傷薬だのをセットにしてお得意さんに預け、次の年、使った分の代金をいただき、使った足りなくなった分を補充する。毎年これを繰り返す仕組みで、担当者は余程のことがなければ替わらないので、親子二代に亘る長い付き合いもめずらし

くなかった。

薬屋さんはゆっくり柳行李のフタをあける。子供たちは拳をぎゅつと握って固唾をのむ。

「さて、と」薬屋さんは子供たちの喰い入るような眼差しを楽しそうに眺めながら「どれにしようかな」と気をもませる。柳行李の一番上には紙風船千代紙・福笑い・双六や簡単な立版古(紙製の組立て玩具)などが詰まっているのだ。貰えるのはせいぜい二つか三つだが、普段は棒切れか蛙や蛇が遊び道具の山家の子供にとつては盆か正月にも勝る瑞気の瞬間でもあった。

今もこの商法による置き薬屋さんはあるが、井山盛りの漬物をごちそうになり、どこぞの娘さんが玉の輿にのつたとか、あんなに元気だったご隠居さんが惜しいことに…とか、はては、今日はもう晩いから泊まっていきなさい、…それじゃお言葉に甘えて…などという、商売ぬきの、人と人とのつき合いは、そこにはない。「先用後利」とは、単なる商売の手段だけではなかったようである。